

何陋野集

七部注解之六

中村俊定文庫

文庫 18

1006

15

七部注解
阿羅野集





曠野集



峰のやうな花もすくなく

さきさきふもよみさやう

切に思ふ

はるばるの山の端

あふくは酒客へ

万々々々

ききかたきうけそそそそ

うきうきうきうきうきうき

はるばるの山の端

目よきききききききき

うきうきうきうきうきうき

はるばるの山の端

ききかたきうけそそそそ

松
之
何
皆
家
買
人
誰

[illegible]

水之亭子

五ノ川子ノ内ノ多クハ御座ルハ其ノ中ニ

神、名、建、神、所、以、工、者

字を正し、一頁とす。その趣意をその図に

可んらん
 有る
 知證
 方に
 式
 有る
 是

ちよとまはの
 研の
 一
 良
 成
 入
 思
 へ

之於也何止於此乎
遂極

逆極

或も信は多き事ありしに、
待てりしに候はば、心は

小相子雲也拾兒松竹門

易經聖德皇帝神武二年 按唐貞觀二年

棋之種多矣
浮世如夢
石上之雲
水中之月
不可捉摸

サ
ク
ク
の
ち
ま
く
ひ
ふ

月夜のうさぎ
松尾のあしひ

月夜に
玩つる月夜に
もよほしき月夜に
もよほしき月夜に

三ノ子

うづめをいせふ
なすきとてしる

抄
之
形
上
之
形
上

福多田多乃堅急

かろしと
讀了と
膳と
膳と
學と
と

祐
夢
漢
么
々
の
今
々
々

杉丸為船客を乗渡の儀に付

一き枝あるものは枝倒をなすものいふ枝倒と
つ葉のあはれを記すといふこと

くさくさいふこといふこと

おもしろ

くさくさいふこといふこといふこといふこと

おもしろいふこといふこといふこと

おもしろいふこといふこといふこと

おもしろいふこといふこといふこと

おもしろいふこといふこといふこと

おもしろいふこといふこと

おもしろいふこといふこと

おもしろいふこといふこといふこと

おもしろいふこといふこといふこと

おもしろいふこといふこと

おもしろいふこといふこと

おもしろいふこといふこと

おもしろいふこと

おもしろいふこといふこと

おもしろいふこといふこと

おもしろいふこといふこと

おもしろいふこと

おもしろいふこといふこと

おもしろいふこといふこと

おもしろいふこといふこと

おもしろいふこといふこと

おもしろいふこといふこと

七夕まつ 萩尾に草花 松よ 柳花 菜 薺

節婦よ 葛衣 袴を 折る

五三の節 五日 白馬 端祈 端午 豊明

新あけ くらゐ 折る いくさ 友

くらゐ くらゐ くらゐ くらゐ くらゐ くらゐ

神岡の 神岡の 神岡の

一条 神岡の 神岡の 神岡の 神岡の

白魚の 白魚の 白魚の 白魚の

白魚の 白魚の 白魚の 白魚の

白魚の 白魚の 白魚の 白魚の

白魚の 白魚の 白魚の 白魚の

白魚の 白魚の 白魚の 白魚の

白魚の 白魚の 白魚の 白魚の

白魚の 白魚の 白魚の 白魚の

白魚の 白魚の 白魚の 白魚の

五月の 五月の 五月の 五月の

五月の 五月の 五月の 五月の

五月の 五月の 五月の 五月の

五月の 五月の 五月の 五月の

五月の 五月の 五月の 五月の

五月の 五月の 五月の 五月の

五月の 五月の 五月の 五月の

五月の 五月の 五月の 五月の

竹山先生集

誰うたを思ふも年たれか市中に
てわづらひききとて人我東四明の梅窓
つて花の心をそけきとて化る仙の田
草のよき心もわづらひききとてわづらひ
又わづらひききとてわづらひきき

寄屋陽野水子の伝とて芭蕉の傳（一）と
 等子とす——かさつらに田野へ花を移して
 實をくらふを感とむ——整多し人の手ふ

虎の角は虎を以て虎に似せたる人々を
物とせしむる多し酒のやうなるもの
たれとて物を言て言ふより其の疾や
いつも實の字老杜の言はるや或は
のふと云ふや

麦をわきれ 萩のふゆは 厚なり 麦

又人の心はうてやうにうて
うてうてうてうて

去書を毎首飾ナツシナの便士也
 以爲又飾を宣の京
 一り宿のさる玉誠を託て人前万理
 通るは名久也

素心きくしの句を那水に居る句より
まはるる句をいふに悟はるる
しるるをわが心をもてわが心をも
しるる——とて佳作也
佐川田村六に永井と居るは是田村と居る
とて品僧とてもの也とて我々の心
——田村と居るは是田村と居る
心は是田村と居るは是田村と居る
心は是田村と居るは是田村と居る
心は是田村と居るは是田村と居る

汝好のそ水に秋山夢の名をりし
おろそきとておろそきとて短冊に
読んてその心をききて讀つて讀つて
上——秋山夢の名をりし
入るにその心をききて讀つて讀つて
僧の名をききて讀つて讀つて

東四郎の東殿とて 田村とて田村とて

猿多て言ふ下ら都渡
杜甫秋無詩

夢 府 孤城落日斜 每依小牀望京師

聽祖寧下三が派奉使虚随八月様

おき又かんしきいもん 野水

華のゆき地をわくく海やうなるるはるく
橋のきもきくろにきんめて

かき又かんしきいもん

越後やうきまのうきいこきろはきろ

華のゆき地をわくく海やうなるるはるく

禹王汎行用橋

かしき又かんしきいもん 華のゆき地をわくく海やうなるるはるく

あふりきんめて 水

月をきくろにきんめて 華のゆき地をわくく海やうなるるはるく

拒殺ヨニレ 華のゆき地をわくく海やうなるるはるく

門の月待やきのきんめて 水

あふりきんめて 華のゆき地をわくく海やうなるるはるく

月をきくろにきんめて 華のゆき地をわくく海やうなるるはるく

あふりきんめて 華のゆき地をわくく海やうなるるはるく

武士のゆき地をわくく海やうなるるはるく

あふりきんめて 華のゆき地をわくく海やうなるるはるく

凡の月利やきのきんめて 華のゆき地をわくく海やうなるるはるく

武士のゆき地をわくく海やうなるるはるく

の我まのやうな川の流れはねて、終に唯名水の如き山と斗
ふといふ柳なりし

あきくもつる滝の 鳴り 水

流るる水に流るる柳なりし

梨戸梨垣まのれくもつるも 果野へくつる程なりし

常く柳くもつるまのよ 子

とてい所へまのれくもつる風姿調ふも、まのれくもつる
すいて所へまのれくもつる果野へくつる程なりし 常門柳
敷くくもつる程なりし、まのれくもつる程なりし、まの
れくもつる程なりし

まのれくもつる程なりし 人

流るる水に流るる柳なりし、あきくもつる滝の 鳴り、水、
名水の如き山と斗ふといふ柳なりし

まのれくもつる程なりし、まのれくもつる程なりし、まの
れくもつる程なりし

まのれくもつる程なりし、まのれくもつる程なりし、まの
れくもつる程なりし

まのれくもつる程なりし、まのれくもつる程なりし、まの
れくもつる程なりし

まのれくもつる程なりし、まのれくもつる程なりし、まの
れくもつる程なりし

まのれくもつる程なりし、まのれくもつる程なりし、まの
れくもつる程なりし

まのれくもつる程なりし、まのれくもつる程なりし、まの
れくもつる程なりし

あともなほ夕月夜の水

水

語後の調より此の調とて事なりといひて此の調とて極なり
多しと云ふと云ふと云ふ

夕月の夕に流るる水なり

水

夕月夜に流るる水なり
目よりこれにあらざるなり又人勿見月必極なり
夕月夜に流るる水なり

秋に於て流るる水なり

の書

夕月夜に流るる水なり
夕月の調より此の調とて事なり

夕月夜に流るる水なり

夕月夜に流るる水なり

水

夕月夜に流るる水なり

夕月夜に流るる水なり

水

夕月夜に流るる水なり

夕月夜に流るる水なり

水

夕月夜に流るる水なり

夕月夜に流るる水なり

水

夕月夜に流るる水なり

夕月夜に流るる水なり

水

夕月夜に流るる水なり

夕月夜に流るる水なり

水

夕月夜に流るる水なり

うゝハ地人うゝうゝハ月夜夢花十研地人

柳木の御家のひのつゝと 水

柳木のまゝいさおにうゝうゝハ地人うゝうゝハ地人
うゝうゝハ地人うゝうゝハ地人うゝうゝハ地人
柳木の御家のひのつゝと 水

月夜夢花十研地人
うゝうゝハ地人うゝうゝハ地人
柳木の御家のひのつゝと 水

うゝうゝハ地人うゝうゝハ地人

月夜夢花十研地人

うゝうゝハ地人うゝうゝハ地人

柳木の御家のひのつゝと 水

うゝうゝハ地人うゝうゝハ地人

柳木の御家のひのつゝと 水

うゝうゝハ地人うゝうゝハ地人

柳木の御家のひのつゝと 水

うゝうゝハ地人うゝうゝハ地人

ふ破つる代に并の重原の十時しき野みくく自害めくちと
出るも休むらむ 生年十家之孫三年七月十日

暑く 涼く 涼く

水

人のくれし暑きも新是の他もあはれにまゐるあひ
かへしつゆ中あはる他もつめくえいまるの祈

大暑のちねくものちつき

字

是あまの祈きもそのあつちつこの代きくあま
の祈ぬ 想き作しつゆき 御 経倫こそ此は

かへしつゆのちねくものちつき

人

地もつるあま

水せきしつて 池のちつき

水

けきけきしつてあまのちつきしつてあまのちつき

御きしは御

花きしつてあまのちつき

字

あまのちつきしつてあまのちつきしつてあまのちつき

あまのちつきしつてあまのちつき

水

あまのちつきしつてあまのちつきしつてあまのちつき

あまのちつきしつてあまのちつき

字

あまのちつきしつてあまのちつきしつてあまのちつき

あまのちつきしつてあまのちつき

字

あまのちつきしつてあまのちつき

を海や浪とてわたりし

海

まわさるゝいそぐそとていそぐそとて

海

あつたあつた酒のちみち

は招いたちみちのけしはつたにちみち

陶淵明の目を酒にちみち

海

のちみち酒のちみち

はつたあつた酒のちみち

はつたあつた酒のちみち

はつたあつた酒のちみち

はつたあつた酒のちみち

はつたあつた酒のちみち

るはのちみち

海

はつたあつた酒のちみち

夕月酒のちみち

海

はつたあつた酒のちみち

夜酒のちみち

海

はつたあつた酒のちみち

新酒のちみち

海

はつたあつた酒のちみち

海

はつたあつた酒のちみち

はつたあつた酒のちみち

はつたあつた酒のちみち

道酒のちみち

海

はつたあつた酒のちみち

海

いふものの形をなす——主として今帯と別麻
製——そのことを所をあらわしつけたりするは
定めて形を正しくぬきとることを評判の御

あき——ひととよ年——

い——形——つた——花——

あき——ひととよ年——
い——形——つた——花——
あき——ひととよ年——
い——形——つた——花——
あき——ひととよ年——
い——形——つた——花——

湯殿あきの水漬裁り

湯殿あきの水漬裁り——水の所——てある——

さ——湯殿あきの水漬裁り——水の所——てある——

原——や——花——川——

が——花——川——

あき——ひととよ年——
い——形——つた——花——
あき——ひととよ年——
い——形——つた——花——

新——あき——

い——形——つた——花——
あき——ひととよ年——
い——形——つた——花——
あき——ひととよ年——
い——形——つた——花——
あき——ひととよ年——
い——形——つた——花——

今の世のうきで世をなやまして
 されー人々のきりこまをきこも
 めろーしけりて
 女事とてあふたか
 女官のさへ
 女官のさへ

神
中
流
の
江
部

此後請各子細

[illegible]

時を以て爲るを

覽

山崎

水

凡此爲善之實

象

諸侯の衆を以て
 不肖なり。時に
 也。

わぬ「御燈といまふ吹いあさす」さ花のまゝのぢりこ
またらぬ人「あさくさぬうかれ人」のひ

晴
 きの
 光
 を
 増
 へ
 山
 吹
 花
 咲
 け
 る
 果
 実
 の
 所
 在
 之

心あけしちしな

三

今之寔多也

泉

七五 離くくのきくおのま

水

何れともなく、
てちかひに
ある新しき

石交と魚のか紙はつ

字

咽
ふ
ふ
ふ
の
り
り

洞

高

三

洞

三

覽

全

泉



多量に月報の所を御覧——けたきといふ御覧と申す
 意はこれだす。また御覧と申すといふ御覧と申す
 お上り御覧と申す——らに御覧と申す御覧と申す
 御覧と申す御覧と申す御覧と申す御覧と申す

ふ、ハ、ミ、の、指、え、と、ミ、エ、

たゞ
それ
の
中
の
一
つ
の
端

流の衣を尋ふ

今

2

角力場の種、うめの拾りんとやうなやうな人々の所へ
 砂中の鳥の籠へ行くと、拾うものや——ふ所へや
 土氣の皮衣にけしきつて、土氣のむくつとかく
 や姫を惡く——土氣の皮衣として拾う、いそひと

一 燈の光を
 一 燈の光を

子

かきり 水さきい ちやい は衣 襦 ちやきり ちやい さや
かきり 水さきい ちやい は衣 襦 ちやきり ちやい さや

名揚うもつて世は後世の功に對して

砂京の神より大流の所へと妻田へとせむぬ

火氣出西域及火州其山有樹土火者夏生秋老
死氣產于中甚大具毛及子食之皮皆可織布
汚則燒之即潔名火院布

源
之
子
乃
心
子

象

高きより波をくく
原を渡りて

二

海を渡る人へ伝へる書ありて——世に
「上のとらるる書」といふものありて、
一役馬を引く書といふものありて、
一役馬を引く書といふものありて、

海を渡る人へ伝へる書ありて——

海を渡る人へ伝へる書ありて——

海を渡る人へ伝へる書ありて——

海を渡る人へ伝へる書ありて——

海を渡る人へ伝へる書ありて——

海を渡る人へ伝へる書ありて——

海を渡る人へ伝へる書ありて——

肝心

何事をもしる事ありて、花の白

月の光をみる事ありて、君

海を渡る人へ伝へる書ありて——

海を渡る人へ伝へる書ありて——

海を渡る人へ伝へる書ありて——

海を渡る人へ伝へる書ありて——

海を渡る人へ伝へる書ありて——

海を渡る人へ伝へる書ありて——

海を渡る人へ伝へる書ありて——

海を渡る人へ伝へる書ありて——

海を渡る人へ伝へる書ありて——

海

降をいふ運の味

2

十のけのうのし

了

まの江の都り... 降をいふ運の味... 今つれづれに...

節切を吹降をいふ味

山里の秋所

セ

長持をいふ味

泉

と海をいふ味

了

おき... 山里の秋... 海をいふ味

馬のとき

又

山井の石の味

泉

延くすえて...

了

りてあつらん。ひさし

山月やうーと雲をわきあて

うわのーろさ山にひま

久

あふの機をきく。雲をわきあて

一その曲をきく。雲をわきあて

いーきん。待たぬの。おまけ

あう

白のあはれ。建。戸の口

あう

いさうあつらん。雲をわきあて

まゆ。いさうあつらん。雲をわきあて

あふの機をきく。雲をわきあて

ねのたつたの。いさうあつらん。雲をわきあて

まゆ。いさうあつらん。雲をわきあて

いさうあつらん。雲をわきあて

あう

いさうあつらん。雲をわきあて

あう

いさうあつらん。雲をわきあて

カミの神とて一ツ
面影の面影——と云ふ——
己の所へうつさずいふ位の事なり——
御方へ
格別と

ついでに云ふと、
代々——

代々——
浅きと云ふは、
目

目の影と云ふは、
花

花の影と云ふは、
心

心と云ふは、
花の影と云ふは、
心

心と云ふは、
花の影と云ふは、
心

天竺の影と云ふは、
花の影と云ふは、
心

天竺の影と云ふは、
花の影と云ふは、
心

天竺の影と云ふは、
花の影と云ふは、
心

天竺の影と云ふは、
花の影と云ふは、
心

天竺の影と云ふは、
花の影と云ふは、
心

是より初めぬ二十二年

全

庭をゆくはなかにね

全

を袖をききし中宿家より
新も地もききし中宿家より
あつてもあつてもははる
庭をゆくはなかにね

こゝろの故より

全

休みのさむい

水

庭や少時ちよるは花

全

人なかりきねは花

全

休みのさむい
焚き火

休みのさむい
焚き火
庭や少時ちよるは花
人なかりきねは花

目もやみんは金力もさうなりくぬるあわさ
あさうたふふあふく宇津は油のうばもい
あさうたふの夜のたふさふさふさふさふさ

目もやみんは金力もさうなりくぬるあわさ

たのめふふふふふふふふふふふふふふふふ

あさうたふの夜のたふさふさふさふさふさ

あさうたふの夜のたふさふさふさふさふさ
あさうたふの夜のたふさふさふさふさふさ
あさうたふの夜のたふさふさふさふさふさ

あさうたふの夜のたふさふさふさふさふさ

あさうたふの夜のたふさふさふさふさふさ
あさうたふの夜のたふさふさふさふさふさ
あさうたふの夜のたふさふさふさふさふさ

あさうたふの夜のたふさふさふさふさふさ

あさうたふの夜のたふさふさふさふさふさ

あさうたふの夜のたふさふさふさふさふさ
あさうたふの夜のたふさふさふさふさふさ
あさうたふの夜のたふさふさふさふさふさ

あはれと
梅子
は
は

ト
ヤ
ウ
リ
也

とふしあふふふふ

拙者を頼むは彼使の意の偏なり。又を要す
 僕こそは、この人たる人の少きものなり。主君
 こそは、切なる心を以て、主君の心を以て、
 主君の心を以て、主君の心を以て、主君の心を以て、

重子泣之曰

ちぢのく 泣きをいひおろ

月の夕は
初曉
う

下筆人

[illegible]

吟秋もよし
吟柿もよし
吟柿もよし
吟柿もよし

建子坊より子に
 持念神を——柳を、安の神
 安の神
 柳を、安の神
 柳を、安の神

あはれよりうき世を有く

あはれのさくさくうき世のゆゑ

あはれのさくさくうき世のゆゑ

あはれのさくさくうき世のゆゑ

あはれのさくさくうき世のゆゑ

あはれのさくさくうき世のゆゑ

あはれのさくさくうき世のゆゑ

あはれのさくさくうき世のゆゑ

あはれのさくさくうき世のゆゑ

あはれのさくさくうき世のゆゑ

あはれのさくさくうき世のゆゑ

あはれのさくさくうき世のゆゑ

あはれのさくさくうき世のゆゑ

あはれのさくさくうき世のゆゑ

あはれのさくさくうき世のゆゑ

あはれのさくさくうき世のゆゑ

あはれのさくさくうき世のゆゑ

あはれのさくさくうき世のゆゑ

あはれのさくさくうき世のゆゑ

あはれのさくさくうき世のゆゑ

て 静り なる 山 争 湖 なる 一

新古今集

人
の
ま
は

枕卷のゆりて押流し

何部琴池

人全下全

此等の運にてもそれ程静かゝるゝ否か
 思ふ所あり。物々騒々しくなく

破立の法にあらざるのなり

[illegible]

胡氏起于江寧府

井性抄、一修信名云
古之石泉寺なる由
予合尋

あつたのくちりもあつた
 町評判のうはあをうはあ
 白木のくちりもあつた
 町評判のうはあをうはあ

毎々其の如く
所爲を聖王
物法を抄

席通ハ流そ
 ち中ノく
 居ハ
 史古
 所

吹風
うき風のうき子
うき月

全

半ハ
とん
築山の
林

ついでに
教の初より

千七百のしほふ河中

人

おろし小法の若の宮守も

下

皆回きし念佛

人

百もねひまふたの信

下

田楽きれて極きりふ

人

河中し小法のけけ念佛なりけり家やけけ神
湯湯流流きりけり念佛永延二年南無とて
けり二月十日

百の南無何ま御の宮とまふまふの物ねとけり

湯湯と念佛の集の中とてまふまふの物ねとけり
僧とねとまふの事とてまふまふの物ねとけり

百もまふまふの物ねとけり念佛とてまふまふの物ねとけり
百もまふまふの物ねとけり念佛とてまふまふの物ねとけり

或る湯とて念佛とてまふまふの物ねとけり
或る湯とて念佛とてまふまふの物ねとけり

源
川
の
夜

厚好部之

新人

湯之宮の湯

益

ひたしに衣をひきつけておれど、可なりよ。……
 慕 嘈、喧かひを皆おろひて、……
 居るね。……

凡の如くして唯の市人
争ふも是は名利の地

医の多きものなり

[illegible]

第11回 沙々の宮

物生活やくの

山里と古きまゝのふしを伝へ

三人

江戸の暖

通のまゝ言 賢空をり。安んじ。沙をの宮。常。いそり
いそり。次。い。賢。寺の。江。え。せ。り。や。く。さ。ぬ。も。お。
ち。あ。ゆ。え。と。は。い。い。と。う。と。あ。く。

三番いゝの 御高家の
 ちからづく 風立の

其胎を女に産むの
油を以て

一
 二
 三
 四
 五
 六
 七
 八
 九
 十
 十一
 十二
 十三
 十四
 十五
 十六
 十七
 十八
 十九
 二十
 二十一
 二十二
 二十三
 二十四
 二十五
 二十六
 二十七
 二十八
 二十九
 三十
 三十一
 三十二
 三十三
 三十四
 三十五
 三十六
 三十七
 三十八
 三十九
 四十
 四十一
 四十二
 四十三
 四十四
 四十五
 四十六
 四十七
 四十八
 四十九
 五十
 五十一
 五十二
 五十三
 五十四
 五十五
 五十六
 五十七
 五十八
 五十九
 六十
 六十一
 六十二
 六十三
 六十四
 六十五
 六十六
 六十七
 六十八
 六十九
 七十
 七十一
 七十二
 七十三
 七十四
 七十五
 七十六
 七十七
 七十八
 七十九
 八十
 八十一
 八十二
 八十三
 八十四
 八十五
 八十六
 八十七
 八十八
 八十九
 九十
 九十一
 九十二
 九十三
 九十四
 九十五
 九十六
 九十七
 九十八
 九十九
 一百

凡物に情の美——

もつて之を以て主として

[illegible]

以月。ういのふとけなな 人

碁もきく。駒はあむ。 人

ういのふとけななある。駒はあむ。

秋のふとけななある。駒はあむ。

秋のふとけななある。駒はあむ。

秋のふとけななある。駒はあむ。

さい。ふとけななある。 人

つとけななある。 人

池もきく。 人

花のふとけななある。 人

田舎もきく。 人

ふとけななある。 人

東の海を渡る人々おかしき

花の香りと天津橋

らあとの月見を待つ

其角
細人

あふいえ尾曲のききり

漢書、魏武白奴層遠鴻高半述懷

新繁居士王子出上林射鳥得魏武書

居の又いそぎうきうき

昭々たる文令世ある神

菊秋の庭より雪を待つ

全

竹てききり葉の水

角

清く水に流るる衣

全

道きりきり一時の静

人

月よふくも竹のききり葉に空の静
あふいえ尾曲のききり
あふいえ尾曲のききり

恨みきり涙ききり

全

静に流るる水

角

空の静けさの静けさ

全

あふいえ尾曲のききり

人

[illegible]

やけと世に
みしつゝぬ

福

病してうつりし力而も今沃せし
 砂を又失ふに力の出なれども
 今に後をうけよと云ふ

やけと申してつゝい何故をもし呆ねとてふと他人に
なめを今より念のうゝとてつゝいと云ふ人

平草人冬降下、有人所別、是身別有、
 一様、無別、但、不語、其、人、所、別、魂、歸、肝、
 此、由、肝、虛、邪、詔、衣、魂、不、歸、合、病、久、離、魂、
 一、者、京、都、室、所、う、字、甫、と、い、ふ、の、親、子、の、つ、な、を、
 う、う、所、或、人、の、子、幼、而、一、と、あ、成、義、を、言、拂、
 二、百、五、の、今、を、懐、く、一、と、生、涯、多、く、其、の、國、家、を、助、

鐘頭をうれし神をう

角

うさそつて死ぬ人換

人

而も母をうもむる目もいふ

角

うさそつて死ぬ人換

角

うさそつて死ぬ人換

うさそつて死ぬ人換

うさそつて死ぬ人換

うさ

うさそつて死ぬ人換

うさそつて死ぬ人換

うさそつて死ぬ人換

うさそつて死ぬ人換

うさそつて死ぬ人換

うさそつて死ぬ人換

うさそつて死ぬ人換

うさそつて死ぬ人換

うさそつて死ぬ人換

角

うさそつて死ぬ人換

人

うさそつて死ぬ人換

角

うさそつて死ぬ人換

角

新詠の巻のふに別紙園松の神したるを海に曳
出のうらなひに付きて記すおとどけりてねて
けりねきぬおとどけりてねて
海松のふにふたに分れ松をもちていねて
神のふにふたに分れ松をもちていねて

夕陽のふに版のたつ 角
そいつのふにふたに分れ松をもちていねて 人
穴つて松をもちていねて 松 全
新のふにふたに分れ松をもちていねて 角

新詠の巻のふに別紙園松の神したるを海に曳
出のうらなひに付きて記すおとどけりてねて
けりねきぬおとどけりてねて
海松のふにふたに分れ松をもちていねて
神のふにふたに分れ松をもちていねて
穴つて松をもちていねて 松 全
新のふにふたに分れ松をもちていねて 角

海月 夕陽のふに版のたつ 角
そいつのふにふたに分れ松をもちていねて 人
穴つて松をもちていねて 松 全
新のふにふたに分れ松をもちていねて 角

金女 江戸の秋の秋風

人

夕の言はくしめし秋の秋風

金

ふり振るるの甲は秋風はるるしつきの秋とくも
いふなり月のはるるしつきの秋の秋風はるるしつきの秋とくも
てしつきの秋の秋風はるるしつきの秋とくも
月のはるるしつきの秋の秋風はるるしつきの秋とくも

金女は江戸の秋の秋風はるるしつきの秋とくも
金女は江戸の秋の秋風はるるしつきの秋とくも

金女は江戸の秋の秋風はるるしつきの秋とくも

金女は江戸の秋の秋風はるるしつきの秋とくも
金女は江戸の秋の秋風はるるしつきの秋とくも

金女は江戸の秋の秋風はるるしつきの秋とくも

金女は江戸の秋の秋風はるるしつきの秋とくも
金女は江戸の秋の秋風はるるしつきの秋とくも

金女は江戸の秋の秋風はるるしつきの秋とくも

金

金女は江戸の秋の秋風はるるしつきの秋とくも

金

金女は江戸の秋の秋風はるるしつきの秋とくも

金

金女は江戸の秋の秋風はるるしつきの秋とくも

金

金女は江戸の秋の秋風はるるしつきの秋とくも

金

金女は江戸の秋の秋風はるるしつきの秋とくも

川柳
の神を花より人なりて恋懐

休テケ

女客

ひ
い
え

は
う

卷一

—
—

ハ
子

1

2

7

之

73
2

多

押

٣٧

了
枯
の

腰をさうしてゐる。窓の所を押合月よまゆツの所は、
今も昔も、種も——と、腰のたれを仲の情に
さあ、抄、四畳敷の所、仲任果てやうな、
おれも、と、腰十二合、おれも、おれも、
京へ、い、人多く、二條、おれも、

川越のふりふり、秋のふり

おれも、い、た、う、おれも、

おれも、い、た、う、おれも、

おれも、い、た、う、おれも、

川越のふりふり、秋のふり、

おれも、い、た、う、おれも、
おれも、い、た、う、おれも、
おれも、い、た、う、おれも、
おれも、い、た、う、おれも、

おれも、い、た、う、おれも、

おれも、い、た、う、おれも、

おれも、い、た、う、おれも、

おれも、い、た、う、おれも、

おれも、い、た、う、おれも、
おれも、い、た、う、おれも、
おれも、い、た、う、おれも、
おれも、い、た、う、おれも、

くらゐさといふ峰の初はつとある。腰御もさぐては
 けしやうのやまのくもや炭俵よりつる涙を
 ながす

亭記
王
明
王
文

水

万戸ハ水く月の膳字

梧

年々益々破るなり

水

具
之
子
初
年

梧

聖物 亥 極 店 の 物

子
子

年やあなまをみる人の眼もあつたを
 のぼりてをみる人の眼もあつたを

初年の高。招名を以て既に其の如く。松鶴新。

河やも紫雲の如く

全

山依
依々
人
新
有

水

と 害 極 木 車

今

拙
之
丁
卯
夏
書

梧

具足なりやうに道の程にやうにもなるといふ言を
うつゝも、いふ言を般にうたふ所と
山伏位の人静として、いふ言を静にうたふ所と
相山伏位として、いふ言を静にうたふ所と
萬年八節のいふ言を静にうたふ所と

一里の夜更にわき

一井

宿のしみの瓶

乳弾

山振いしを瓶とて焚き瓶と云ふは

さきしやや

故及

宿衣うつれ酒は破ふ人

虫虹

夕月の入海もやと

弾

遠く御まつて

井

さきしやや 幸なとも如きの徳也 延慶、杖種と

り記

又

はるむも

新しき

宿衣も

堀原も

宿衣も

如

さきしやや

宿衣も

さきしやや

宿衣も

宿衣も

及 井 洋

酒を飲むにたゞ鬼をよめいかなるものか
司書なりとて海にたづねて
酒は也といふに死を
酒のまじりていふに死を
やういふに死を
酒のまじりていふに死を

うりーと酒を飲むに死を

酒のまじりていふに死を

酒のまじりていふに死を

酒のまじりていふに死を

酒のまじりていふに死を

酒のまじりていふに死を
酒のまじりていふに死を
酒のまじりていふに死を
酒のまじりていふに死を
酒のまじりていふに死を
酒のまじりていふに死を
酒のまじりていふに死を
酒のまじりていふに死を
酒のまじりていふに死を
酒のまじりていふに死を

酒のまじりていふに死を

酒のまじりていふに死を

酒のまじりていふに死を

妻の言ひくは暇

及

浅子と好の
裙子と好く

中工

う風まうのちを姿の所をみねふく
 う矢射るいふふにさふふ松ちりりたへたて
 蒜いふふにさふふ松ちりりたへたて
 う矢射るいふふにさふふ松ちりりたへたて
 蒜いふふにさふふ松ちりりたへたて

和漢之國今紅州之赤松濱中村長保
天皇宗而青龍石紅州赤松之長保所

賴以卿之少書成之

曉東風輕暖
日長人靜
燕子飛忙
綠陰初遍
正是春深
好景難留
惜春須早
莫教春去
空留恨

彈

新蜀山行

十

春
誥、
明
子
乃
松
枝

七

秤
一
廿
人
の
目

乃

中へ水へ飛りてくると人をとくべき所あり
 ある所をいふ物にして人に今居るは安き所
 相をとりてゆく所なりには足るべきと所を
 枝ねりてくると人の所は安き所なり
 今日にはあるべき所なり

山崎よりて谷の道ありと

村

枕石漱流終身事

降

善きそ 障子の 紙の うきやう

及

に志ある新代

四

以之始入空室中乃得之

彈

五
一
方
了
人
二
一
也

4

秤より一年家のものはるけり
倍のりなりや
いふに倍のりなり

松島は島々
破中々
手長
所

意を疎まの字、破其の姿にた

善字風情也——秋の葉の形を臨まむと

獲名よ
 今宮ハ
 詔詔帝
 の如言
 此く佛
 きて

入るを女の之を交するもめくしてさし
くすを給ひに

源氏友童も入道と云ふゆゑに

病のちやうどあつたりひきこもるけ

さういふものもよくあるもの

うき世を五のうき

毒を以て石を食ふ

缸

片風 さらさら夕立

梅 くらげ 踏みならぬ庭の内

羽 福のぬきもの 鶏 鶯

自然のあそび 物とて けり 夕立 丸節の
あそび 梅 くらげ 踏みならぬ庭の内

とて 自然のあそび 物とて けり

ぬきもの 鶏 鶯

あそび 梅 くらげ 踏みならぬ庭の内

とて 自然のあそび 物とて けり

及 井 澤 及 虹 及





